

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese di Kyoto

私のイタリア留学体験記

* おんな二人旅のイタリア留学 *

藤井 久子 & 村松 真千子

【Parte I: 藤井 久子】

イタリア会館で2年程同じクラスで学んできたクラスメートと一緒に一週間の語学留学のため FIRENZE へ。今回、二人で合作による留学体験記ということで、私はイタリア語の勉強以外のパートを担当させていただきます。



【フィレンツェのシンボル Duomo】

紹介していただいた学校は ISTITUTO EUROPEO で授業は月曜から金曜までが1クール、アパートは日曜日に入って土曜日に退去というパ

ターンでした。さて、土曜日の夜に FIRENZE に到着して、一晩はアパートのすぐ近くのホテルで休み、大家さんと約束の朝11時にアパートに行かなくてはならないので、5分前には荷物をひっぱりながら、着いていました・・・ところが11時を5分、10分と過ぎてても、肝心の大家さんは現れない・・・そこへ、いかにもイタリア美人といった女性が「どうしたの？」って感じで寄ってきてくださり、住所を書いた紙を見せると、「そうね、確かにここね☆」と言って、ベルを鳴らしたりなんかして、助けてくださるも、応答なし・・・きれいなお姉さんの親切に感謝しながら、まあ5分前には着いてしまうのも日本人の性か・・・と、相手は外国人(もちろんイタリア人)なので、こんなもんかな・・・ともう少し試してみることにして、さらに約20分待ってみただけ誰も現れない・・・そこで、とうとう電話してみることにしました。「CIAO！」とても明るい感じで「今どこにいる？」内心こっちが聞きたいと思いつつもアパートの前だと伝えると、「すぐに行く！」ってことで、5分くらい待っていると、さっそうとバイクに乗って、大家さんの Signora Geri が到着しました。ヘルメットをとると、とてもきれいな方で、実は11時に FIRENZE の空港に着くものと勘違いされていたようでした。さっそく鍵を渡されて、表のドアの鍵の開け閉めからのスタートで、次は私達の部屋のドアの鍵の開け閉め、ちょっとしたコツを交えて二人とも順番にやってみて、って感じで丁寧に教えてくださり、次は部屋の金庫のパスワードの換え方、開け方から、ガスのつけ方や洗濯機の使

い方、トイレの流し方まで、すごく丁寧に教えていただきました。部屋にはバスタブこそなかったものの(夏なのでシャワーさえあれば OK)、食器やリネンはもちろんのこと、バスマットやバスタオル、ドライヤーまで揃っていて、洗剤や冷蔵庫の中の水など、「あるものは全部使ってね!」と、至れり尽くせり。そのうえ旦那様と小学生の男の子供さんまで、「アイロンが無かったから・・・」と、わざわざ買ってきて届けてくださいました。夏なので、Tシャツとか短パンやGパンしかもってきてない私達は大変恐縮しました。それに加え、部屋でインターネットができるように無線 LAN がついていて、パスワードも教えてもらって無事つながったりと・・・また、部屋についての説明が終わったら、ちょっと外にと促され、すぐ近くのスーパーや、おいしいレストランの場所も案内してもらい、学校もポンテヴェッキオも何もかもすぐ近くで、十分すぎるくらいの便利なアパートでした。学校の日本人スタッフの方が「何かお困りはないですか?」と心配してくださったので、すごく満足していると報告すると、逆にビックリされていました。というのも、たいてい学生アパートは洗濯機もなく、コインランドリーに行くのが普通で、インターネットも学校以外ではネットカフェを利用するのが当たり前なので、入学者には学校側から生徒にサービスとしてネットカフェの30分間無料カードをプレゼントしているくらいだということでした。私自身は、こういう海外滞在の経験は初めてですので、どこまで当たり前なのかはわからないけど、学校の方がビックリされている表情を見ても、私達はとてもラッキーなんだなと思いました。

また、今回ラッキーはこれだけではなく、なんと FIRENZE の街がバーゲンセール中! イタリアはバーゲンセールの期間が法律で定められているのは知っていましたが、まさか丁度そのタイミングにイタリアを訪れることができるなんて・・・有名ブランドが 30%~40%OFF は当たり前、50%のお買い得品も有りとか・・・おかげで帰りは重量オーバー(笑)。

ちょっと余談になりますが、表のドアや部屋のドアは半自動でした。というのも、開ける時はもちろん鍵で開けますが、閉める時は勝手に鍵がかかるようになっていました。オートロック式というか・・・内側に鎖を使って仕掛けがしてあって、手作りの

自動ドア? また、キッチンの中のドアの内側にゴミ箱がついてあって、開けると勝手にゴミ箱の蓋が開いて、ドアを閉めると蓋も閉まる仕掛けが手作りでもヒモを上手にを使って細工してありました。思わず「かしこ〜い!」と感心しました。

ともかく、はじめてにしてはラッキーな留学体験になりましたが、イタリアの学校の方々、親切な大家さん、一緒に留学してくれた MACHIKO、また、一週間留学を応援してくれた家族達に感謝です。本当にありがとうございました。

[Parte II : 村松 真千子]

さて、学校の方はと言うと、土曜の夜に到着後、日曜は丸一日、観光気分でも過ごし、本来の目的を忘れかけそうになりましたが、月曜から一週間のプログラムが始まりました。初日のみ通常の始業時間である9時より15分早く来るようにと事前に連絡を受けており8時45分に到着。その後すぐレベルチェックのためのテストを受けました。30分程度の筆記テストとオーラルテスト、オーラルテストといっても1対1で行うものではなく、我々2人と先生の3人で、名前は? 出身地は? イタリア語勉強の目的は? イタリア語学習はいつから? 等々イタリア語での簡単なやりとりで、テストという雰囲気は全くなく、日常的な会話でした。事前に聞いてはいましたが本当に簡易なテストでした。その後、これまでどの文法まで勉強したかの質問を受け、2つの選択肢を提案されました。新しい文法を学ぶクラスにするか、それともすでに日本で勉強した内容を学ぶクラスにするか、無論内容を完全にマスターしているわけではないので、復習もかねて勉強済みの内容を学ぶ1レベル下のクラスを選択しました。実際クラスに加わり、授業がスタートすると、この選択は正しかったと確信しました。

テキストを購入しクラスに加わり、簡単な自己紹介の後さっそく授業が進行されました。当たり前なのですが全てがイタリア語、先生の説明も質問も、生徒からの質問も。イタリア会館でしか勉強したことがなく、わからなかったら日本語でも質問できることに無意識のうちに慣れていたため、まずは先生の言っていることを理解するのに必死。当初、授業内容に集中するどころではありませんでした。幸い授業内容は既に勉強したことのある

項目だったため、さほど難しさを感じることもなく復習感覚で練習問題もこなすことが出来ました。疑問点の質問だけでなく、簡単な内容一例えばエアコンが効きすぎて寒いです、といったこともイタリア語でどう表現したらよいのやら、戸惑いと不安だらけで初日の授業はスタートしました。もし、新しい文法を学ぶ1レベル上のクラスを選択していたら、授業内容が全く理解できず落ちこぼれ生徒になっていたのは間違いなく、周りにも迷惑をかけた挙句、今回の留学を後悔することになっていたのでは、と推測されます。

授業の進め方は日本とほぼ同じ、まずはテキストを読み、先生が説明し、疑問点があれば質問し、その後練習問題を一人ずつ回答する、といった進め方。何れも日本での進め方と同じですが、唯一の相違点は日本語に訳す作業がないことです。日本でのレッスンでは訳すことも重要視されていたため、最初は違和感がありましたが、現地での授業に訳すという作業は不必要、イタリア語はイタリア語のまま理解すればよいのです。午前の授業は前半90分、後半90分の2部構成。前半と後半の間には30分もの休憩時間があり、パールに出かけたり、喫煙したり、30分は私にとって少々長すぎる感もありますが、それがイタリア式なのでしょうか。

初日の授業の最後に、先生から今週は水曜に各自プレゼンテーション、木曜にテスト、金曜はDVD鑑賞と今週のスケジュールについて概要説明がありました。プレゼンテーションは『先月何をしたか』というタイトルで5分程度話をするというものでした。ちょうど習得した近過去を使用して、事前に書いてもいいけど、書いたものを読まないようにとの指示があり、テストは前回テスト後に勉強したところが範囲。プレゼンテーションについては事前に暗記するほどではないのですが、話す内容を準備し、テストもアパートに帰宅して授業内容を復習し、何十年ぶりのテスト勉強、すっかり学生のようにでした。

読んだり書いたりすることは何とか一人でも時

間を費やせばそれなりに習得できますが、リスニングとスピーキングは一人での勉強は難しく、相手があって初めて成立するものです。5日間という短い時間でしたが、初日の授業では全く理解できなかった先生の説明が完璧とはいえませんが徐々に理解できるようになり、疑問点も単語の羅列のようなレベルですが質問もできるようになり、少しの上達とイタリア語に対する慣れを実感することができました。



【ピッティ宮殿で2ショット】

勉強だけでなく名所旧跡がある街で、かつ一週間だけでも受け入れ可能な学校ということで探し、今回はフィレンツェの学校を選択しました。学校自体は満足できる学習内容を提供してもらえましたし、学校経由で手配してもらったアパートも暮らしやすく、授業料もアパート代も決して高いものではありませんでした。ただ、フィレンツェという観光都市ではレストラン、ショップ、どこでも英語が飛び交っています。こちらがつかないイタリア語で尋ねても、英語で返される場合が殆ど。その後続く会話どうしても英語のままとなり、学校以外でイタリア語を試すチャンスがあまりなかったのが残念なところでした。フィレンツェでもいいですけど、あまり英語の通じないところの方が、話すチャンスが増えるのではないかと、帰国早々、いつできるかわからない次回の留学に、さっそく想いをめぐらせたのでした。

(語学講座受講生)

イタリア発月刊日本語新聞

COM EVA
Pubblicazione mensile distribuita in Italia e in Giappone

イタリア在住日本人と日本人観光客のための情報誌

編集・発行 NIPPON CLUB SNC
Via Torino, 95 - 00184 Roma, Italy
Tel. & Fax : (06) 4743. 212
E-mail : comeva@nipponclub.it
URL : www.nipponclub.it

お問い合わせ等はNIPPON CLUB SNC 宛てにお送り下さい。

VIVA IL CINEMA ITALIANO !

第19回『アマルフィ 女神の報酬』

AMALFI

松島 征

今回は、前回(7月号)の『天使と悪魔』に引き続き、首都ローマを主たる舞台とする映画作品を取り上げます。フジテレビ開局50周年プロジェクトとして構想され製作された、日本映画史上初めての「オール・イタリア・ロケーション」を売りものとする『アマルフィ 女神の報酬』がそれです。映画は、ローマのレオナルド・ダヴィンチ国際空港から始まり、カピトリーニ美術館で誘拐事件が発生し、主人公はその謎を追ってテルミニ駅、サンタンジェロ城、スペイン階段などをあわただしく駆け巡ったのちに、美しい港町アマルフィにスキップ、最後はまたローマに戻る、という構成になっています。わたしのような「イタリア大好き人間」にとっては、風景や街の表情の描写はかなり満足の行くものでした。とりわけアマルフィの町の俯瞰撮影は見事。でもシネマ作品の価値は映像美だけで決まるものでしょうか。フィクションとしての作品の成否を決めるものとして、俳優よりも、監督よりも、カメラマンよりも大事なものがあるとわたしは思うのです。それは映画の脚本(シナリオ)です。その意味で、この映画の出来栄には疑問が残りました。

つぎ込まれた製作費、豪華なスタッフ・キャストという側面からいうならば、たしかにこれは「大作」なのでしょう。でもわたしのような大作嫌いのへそまがりの視点から言わせてもらうならば、映画のストーリー自体が荒唐無稽であり、風景そのものは別として、イタリア人のもつ人間臭い魅力があまり生かされていない、と思います。巨額の製作費を投じればよい作品ができる、とは限りません。なによりもミステリー作品としての骨格が弱い。冒頭の少女誘拐事件を始め、ストーリー展開はご都合主義で場当たりのなものです。同じサスペンス映画でも、ダン・ブラウン原作の『ダヴィンチ・コード』や『天使と悪魔』の方がまだミステリー仕立てのストーリー展開に、ある種の整合性・必

然性がありました。これらの作品の背景には、キリスト教の二千年の歴史があり、シオン修道会、オプス・デイ、聖杯伝説、イルミナーティなど、歴史的事実による裏付けがありました。『天使と悪魔』の4つの殺人現場は、バロック芸術の代表的建築家・彫刻家のベルニーニとすべて関係がある、という念の入れようでした。これに対して『アマルフィ』には、このような歴史的・美術史的な趣向が見られない。



「アマルフィ 女神の報酬」

ちなみに、アマルフィは西洋の中世において四大海運共和国としての一つでした(他の三つは、ヴェネツィア、ジェノヴァ、ピサ)。10~11世紀にかけて経済的繁栄を謳歌したのですが、地震と津波の被害を受け、土地の多くが海中に没してしまいました。現在は「アマルフィ海岸」Costiera amalfitanaの美しい海岸線を目玉とするイタリア有数の観光地です。この周辺はレモンの名産地で、「レモンチェッロ」というリキュールがおいしい。また大勢の芸術家・画家に愛されてきました。オランダの奇才エッシャーも、この町の迷路的な構造に魅惑されました。

ところで『アマルフィ 女神の報酬』のサブタイトル「女神の報酬」には、いかなる意味が込められ

ているのか。「女神」とはだれのことなのか。天海祐希扮する美女のヒロインのことなのか。それとも、アマルフィの町の名の起源となった妖精のことなのか。いったいどのような女神がどのような報酬をあたえてくれたのか、厳密さに欠けるネーミングです。

この映画のプログラムの第1頁には、こうあります。「ギリシャ神話の英雄ヘラクレスは、愛する妖精の死を悲しみ、世界で最も美しいとされる場所に、その亡きがらを埋めて町を作った。彼女を永遠のものとするために…。その町の名は一アマルフィ。」織田裕二扮するヒーローがアマルフィの海辺で、この町の名の由来をヒロインに告げるシーンがあります。「ぼくにとってきみの存在はアマルフィなのだ」とでも云いたげに…。

映画『アマルフィ』のストーリーを簡単に紹介しておきましょう。サスペンス映画らしく最後は意外な展開となっていますが、これからこの映画を見ようと思っている方は、以下の文を読まない方がいいでしょう。

- 1) イタリアでのテロ予告の情報をえて、外交官黒田(織田裕二)が、クリスマスを目前にしたローマの街に到着する。
- 2) ローマの日本大使館の職員は、外務大臣のローマ到着に備えて大忙しの最中。
- 3) カピトリニ美術館のトイレから日本人の少女が誘拐される。犯人から身代金の要求が来る。通訳に当たった黒田は、少女の「父」と名乗ったために事件に巻き込まれる破目になる。
- 4) 少女の母親紗江子(天海祐希)と黒田は、身代金を指定された場所で犯人に渡すために、テルミニ駅から始まり、サンタンジェロ城、スペイン階段、トリニタ・デイ・モンティ教会などの各所を駆け回るが、用意した身代金が偽物であることが犯人にばれてしまう。
- 5) ロンドンにいるはずの紗江子の恋人、藤井(佐藤浩市)がローマに登場。
- 6) 黒田の焦り。イタリア警察との確執。大使館内での孤立。
- 7) 誘拐犯からの呼び出しを受け、黒田は紗江子とともに身代金をもって車でアマルフィに向かう。だが犯人はあらわれず(のちに陽動作戦だったとわかる)、代わりに藤井が再びあらわれる。

8) イタリア警察の協力のもと、黒田は警備会社ミネルヴァに潜入し、防犯カメラのからくりを暴く。突然、紗江子がピストルを振り回し、黒田たちの捜査を妨害する。どうやら藤井の指示による行動らしい(ここでようやく「誘拐事件」そのものがもっと大きな事件を隠蔽するための陽動作戦であることがわかる)。

9) ローマの大統領官邸(実際の撮影は、ナポリ近郊のカゼルタ宮殿でなされた)では、スーパースター、サラ・ブライトマンのコンサートがおこなわれている。彼女はヒットソング“Time to say good-bye”を歌う。ここでも犯人たちは、大統領の暗殺を狙いであるかのような陽動作戦を展開する。

10) 藤井たち犯人の真の攻撃目標は、ローマに着いたばかりの外務大臣(平田満)であった。彼らは日本大使館のパーティ会場に潜入し、大臣を人質にとって、彼の過去における不正行為を告白させる。

11) コロッセオの前で交通渋滞に巻き込まれていた黒田がようやく大使館に駆けつけて、混乱した現場を収拾し、犯人たちを投降させる。

12) 娘がもどってきた紗江子と黒田は、思い出のアマルフィを再び訪れる。

13) 次の任務のために南米に向かう黒田。見送るのはイタリア警視庁の警部ただひとり。

以上の内容に対するわたしの独断的な感想を書きます。まず(4)のローマ名所巡りについて。主人公たちが走り回る観光地とその順番にはなんの論理的必然性も趣向もない。過去の名作『ローマの休日』や最近の話題作『天使と悪魔』との格の違いは歴然たるものです。身代金引き渡し場所トリニタ・デイ・モンティ教会に行くのにスペイン階段を駆け上がる必要はない。時間を稼ごうと思うのであれば、丘の坂道を車で上がった方がずっと早いのです。

紗江子がピストルを振り回す場面(8)では、黒田とイタリア警察がなぜ彼女を取り押さえようとしていないのか。相手は銃器の扱いに不慣れたたった一人の女なのに。そもそも警備会社の機密室に入れてもらうのにボディ・チェックもないなんてウソかい。

そもそも最初から、なぜ紗江子の娘を誘拐する必要があったのか。日本大使館の目をそらせる

ための陽動作戦らしいが、説得力に欠ける。藤井が本当に紗江子を愛しているのならば、彼女を苦しめるような作戦を立てるはずがないのでは…。

黒田という若い外交官の活躍はカッコよすぎる、と思います。頭脳と腕力を駆使した立ち回りぶりは、まるでジェームズ・ボンドのようではないか。ということは、彼はひょっとして諜報部員 (secret agent) なのか。日本の外務省にそのようなポストが存在するのか。日本の官僚組織の中には、このような一匹狼を飼う余地はあるのでしょうか。「監督は木枯次郎がお好きだそうで、そのイメージを取り入れたりもしています」と原作者の真保裕一は述べています。

サラ・ブライトマンの登場するコンサートのシーン(9)は、この作品のクライマックスでした。ナポリの近郊にある豪華絢爛たるカゼルタ宮殿(1997年、世界遺産に認定)がその舞台に選ばれています。サラ・ブライトマンの歌いっぷりは、彼女の全盛期に比べるとやや迫力に欠けますが、それでも貫禄は十分すぎるほどでした。このコンサートも、犯人たちの陽動作戦の一環のようです。要するに製作者が、この映画の中にサラの歌う場面を入れたかった、ということでしょう。このことは、この映画のプロデューサー大多亮の発言に裏書きされる—「今回は最初から、サラ・ブライトマンの“Time to say good-bye”を使おうと決めていました。そこに理由はなくて、直感的なものです」(映画のプロ

グラムより)。

最後に結論として述べたいのはこうです。最近の日本の映画にこの種のご都合主義的な作品が多いのはハリウッド映画の商業大作路線の悪しき影響のせいではないでしょうか。『アマルフィ』に先行して見せられた予告編の大部分は、アメリカ製のパニック映画でした。銃の発射音、車のぶつかる音、人間の悲鳴、これでもかという限界的狀況の連続で、目も耳もふさぎたくなるものでした。前回の『天使と悪魔』のときにも書きましたが、こんな殺伐とした作品ばかり見続けていると、繊細な神経など麻痺してしまい、他人を傷つけたり殺したりすることにブレーキが効かなくなってしまうのではないのでしょうか。恐ろしいことです。



「アマルフィ海岸」

(京都大学名誉教授・フランス文学)

… 会館 だ よ り …

实用イタリア語検定 直前講習会

講師: 当館イタリア語講師

日時: 9/26(土)

①5級向け: 10:30~12:00

②4級向け: 13:00~14:30

③3級向け: 15:00~16:30

参加費: 2科目 一般・受講生 3,000円
個人維持会員 1,500円
1科目 一般・受講生 2,000円
個人維持会員 1,000円
会場: 日本イタリア京都会館 本校
定員: 30名

進化しつづけるイタリアの旅

イタリア政府観光局のエニコ・マルティーニ局長によるアグリツーリズムの魅力満載の講演。

講師: エニコ・マルティーニ(イタリア政府観光局局長)

日時: 10/3(土) 18:00~19:30

参加費: 受講生・一般 1,500円
個人維持会員 500円

会場: 日本イタリア京都会館本校
定員: 50名



編集・発行 / (財) 日本イタリア京都会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4
TEL: (075) 761-4356 / FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italia.on.arena.ne.jp
URL: <http://italiakaikan.jp>